

11. 旧約聖書における六書

現代の旧約聖書研究の世界で、19世紀の方法から画期的な変化をもたらした G.von ラートは、旧約聖書の中に存在する最も古い信仰告白に注目して、それが六書(創世記からヨシュア記まで)の内容の輪郭となっていることを指摘しました。その輪郭とはほぼ以下のようなものです。「世界を創造した神はイスラエルの父祖たちを召し、彼らにカナンの地を約束した。イスラエルがエジプトで数多い民となったとき、モーセは神の不思議な力と恵みのしるしによって民を解放し、長い荒野放浪の後に約束の地を与えたのである。」

このような信仰告白の記憶を、私たちは申 26:5-9 に見ることが出来ます。それは現代の用語で言えば“典礼文”と呼べるもので、礼拝者たちが地の実りの初物を籠に入れて中央聖所(初期には恐らく幕屋)に持参したときに唱和したもののようです。「わたしの先祖は、滅び行くアラム人であり、わずかな人を伴ってエジプトに下り、……主は力ある御手と御腕を伸ばし、大いなる恐るべきこととしるしと奇跡をもってわたしたちをエジプトから導き出し、この所に導き入れて乳と蜜の流れるこの土地を与えられました。」これはもはや個人の感謝の祈りではなくて、イスラエルの共同体を存在させるに至った大いなる救済の御業を要約した、共同体の信仰告白であります。

さらに申 6:20-24 には、全く同様な信仰告白の形をした救済の事実の要約が引用されています。「将来、あなたの子が、“我々の神、主が命じられたこれらの定めと掟と法は何のためですか”と尋ねるときには、あなたの子にこう答えなさい。……」

G.von ラートが取り上げている第三の箇所はヨシュ 24:2-13 で、それはシケムにおける契約更新の祭りの場面に登場しているものです。ここではイスラエルの全部族……その中には元来のシナイ契約では含まれていなかった部族もいる……が契約に加わり、出エジプト伝承を彼ら全体の信仰告白とするのです。「民は答えた。“わたしたちも主に仕えます。この方こそ、わたしたちの神です。”」(v.16, v.18)

これらに共通しているのは、それらの文章が現在の形になるかなり前の、古い祭儀における信仰告白の名残を留めていると思われることです。それはまさに六書の骨組みであって、以下の三点が特に強調されています。すなわち (1) 神によるアブラハムの選び (2) 出エジプトにおけるその民の解放 (3) 嗣業の地の取得。

ここから私たちが知るイスラエルの初期の信仰告白の形は、それが神の大いなる救済の御業の、祭儀における朗読であって、それがイスラエルがその後の歴史の中で繰り返し信仰を告白して行くときの、典型的な形の起源となったということです(例えば 詩編 77, 78, 105, 136 など)。

初期のイスラエルは、「あえて一つの国民を他の国民の中から選び出し、御自身のものとされた」(申 4:34)神の大いなる行為という主題を中心として、父祖たちの時代の物語りや、シナイ、モアブ、シケムにおける契約の伝承、その他多くの伝承をこれに加えて行きました。このようにして集成されて文書化されて行ったと考えられる古い資料の名前が、フランシスコ会訳聖書のヨシュア記解説(444 ページ)に紹介されています。それは、ヤーウェ(J)、エロヒム(E)、申命記(D)、祭司(P)資料の四つです。

このフランシスコ会訳聖書の解説にも述べられているように、現代では旧約聖書の中の歴史物語りの部分は、最初四書(創、出、レビ、民)と申命記から列王記下までのいわゆる“申命記史家の歴史”とを区別して考えるようになりました。ただそれはあくまでも編集史に関する議論であって、上記の“祭儀における救済の御業の朗読”という背景の重要性は、いささかも減じてはいないのです。

12. 旧約聖書の編集史

初期のイスラエルの歴史が最初に編集されたのは、統一王朝の全盛期、恐らく BC.950 頃のソロモンの治世でありました。その編集者あるいは著者は“ヤーウィスト”あるいは単に“J”と呼ばれています。彼が用いた諸伝承の多くは、その時代よりもはるか以前から共同体の中で伝えられて来た口頭伝承であって、彼はこれらを喜びと確信と信仰に満ちた偉大な著作に仕上げました。アブラハムに対する神の選びと約束(創 12:2f)とは、(1) 出エジプトとシナイにおける民族の形成、(2) 嗣業の地の取得、(3) ダビデ王国の成立、という三段階において実現したと、“J”は理解しました。この一民族に対する神の御業を描く背景として、彼はすでに民間に流布されていた先史時代の物語りを収集し、創 2:4b~12:9 でこれを語り直すことによって、人間とその文明に対して洞察に富んだ分析をしたのです。

“E”資料と呼ばれるものは、現在“J”への補足としてのみ識別される北イスラエル起源のもので、二三の部分では“J”に取って代わっていることも認められています。

やがて捕囚時代になって、かつての神殿の祭司団に属する人々は、破壊されたエルサレム神殿の古文書庫から救出した資料によって“JE”を編集し、これを付加拡大しました。これが“P”資料と呼ばれるもので、創 1:1~2:3a の創造物語りもその一部です。その最大の仕事はシナイ契約への詳細な追記であって、幕屋とそこでの礼拝および祭司制度に関する古い制度と規定という、彼らと神殿にとって中心的重要性を持つ資料の保存に決定的に関与したことであります。

創世記から民数記までの四書が最終的に現在の形になったのは、恐らく以上のようにして BC.6 ないし 5 世紀にかけてのことであり、捕囚から帰還して新しく誕生した共同体の規範的文書として用いられたと思われる(ネハ 8 章参照)。

BC.622 年に神殿で発見された一巻の古文書は、ヨシヤ王の宗教改革を引き起こしました(王下 22-23 章)。この古文書とは、明らかに現在の申命記の中核をなす文書であって、やがてそれを土台にしたヨシヤ王記から列王記下までの“申命記史家の歴史”が、およそ BC.600 年から 550 年までの間に成立します。

申命記の核心は、この民を選び、エジプトから導き出し、これと契約を結んで彼らに嗣業の地を与えてくださった主の救いの御業に基づく、イスラエルの信仰の表明です(申 4 章)。そこには、民がもし神の求めにふさわしいものであるなら、「あなたもあなたに続く子孫も幸いを得、あなたの神、主がとこしえに与えられる土地で長く生きる」(4:40)と述べられています。申命記史家はこのことを序説として用いながら、約束の地における民の物語りを進展させ、そして最後に、なぜこの土地が失われたかという理由を説明したのです(王下 24:20)。

以上から明らかのように、旧約聖書の骨組みを成しているものは、イスラエルを選び出してご自分の嗣業の民とされた、主の大いなる救いの御業の信仰宣言であって、この光の下で以降の歴史はすべて解釈されているのです。

これらの歴史資料収集の最後に位置するのが、BC.400 年頃の“歴代誌的史家”による文書です。それは歴代誌上・下、エズラ記、ネヘミヤ記の四書で、その目的とするところは、かつてのエルサレムの廃墟の中でその再建を志している捕囚地からの帰還民を励まし、生き残ったこの小さな群こそが先に失われた一切のものの継承者であるという、救済史の連続性を保証することでありました。

エズラはしばしば“ユダヤ教の父”と呼ばれます。聖書の歴史の中で、“ユダヤ人”“ユダヤ教”という概念が生まれるのはこの段階からだからです。彼はキリスト教の父ではなく、それはやがて誕生するキリスト教とは相異なる別の流れ、“ユダヤ教”へと到達するのです。

しかしながらこの“ユダヤ人”こそが、イエスの到来の時までずっとイスラエルの希望の唯一の担い手であったこと(ルカ 1:54f, 2:25f, マコ 15:43)、そしてそのユダヤ人の中から御子イエス・キリストは誕生されたということ(マタ 1:1ff, ロマ 9:5)を、私たちはいささかも軽視してはなりません。さらにキリスト教会が正典(Canon)としてユダヤ教から受け継いだ“旧約の聖なる文書群”を、エルサレム滅亡の火から救い、その信仰を新しい新約の時代の到来まで保存したのは、エズラに先立った者たちと後継者たちを含めた、他ならぬこのエズラ集団であったことを、現代の真面目な聖書学習者は決して忘れてはならないのです。

13. 正典としての聖書

前回の講義の末尾で、キリスト教会は“旧約の聖なる文書群”を、正典(Canon)としてユダヤ教から受け継いだということを述べました。それは BC.3 世紀に始まり、キリスト紀元前には完成していた七十人訳と呼ばれるギリシア語訳の聖書(LXX)で、当時ギリシア語を話すユダヤ人(使 6:1)の間に普及していたものです。しかしキリスト教会がこれを正典として受け入れたために、ユダヤ教側では AD.90 年頃ヤムニアの会議でヘブライ語正典を最終的に決定して、その際 LXX に含まれていた続編の部分は除外してしまいました。ローマ教会は公式に続編を聖書の中に含めているので、フランシスコ会訳聖書は LXX の様式を継承しており、これに対して新共同訳聖書ではヘブライ語正典と続編とを区別して配列しています。キリスト教会における旧約聖書正典の範囲に関する論争は、すでに 4 世紀に始まる長い歴史を持っていて、一般信徒が安易に口を挟むような簡単な問題ではありません。ですから私のこの講義では、そのような論争を棚上げにして(不確定のままで)、“旧約聖書”という呼称を使って話を進めて行くことにします。

原始教会が“旧約聖書を自らの正典として受け入れた”と言うとき、その教会とは、イエス・キリストの出来事を旧約聖書が語って来た救済史における神の御業の頂点ないし完成として捉え、宣教している共同体でありました(ヘブ 1:1-4)。ですから、この福音の宣教から切り離しては、キリスト教会における正典というものの意味を正しく理解することは出来ないのです。そこにあったのは、救済史は教会を通して地上で続行する、つまりキリストの受肉からその再臨までの教会の時は、救済史の一部であるという認識です。それ故に第二世紀の教会が新約聖書の正典を、そこには使徒に由来する文書のみを採用するという配慮をもって創ったとき、それは旧約聖書と合わせて一つの正典となったのであって、決して独自に新しい別の正典が誕生したものではありませんでした。

このような救済史の認識は、啓示によって教会に知らされました。歴史の教会はこの啓示の中にその存在の基礎を持っています。この啓示の証人が使徒たちであり(ガラ 1:11f)、私たち代々のキリスト者は使徒たちの証しを通して啓示を与えられ、啓示を受け入れるのです。信仰とは、このような使徒たちが証しする啓示に自発的に同意すること(神の啓示に関する教義憲章 5)に他なりません。ローマ・カトリック教会は、聖伝と旧・新約聖書の二つが、使徒たちから伝えられた啓示を伝達する器であると教えています(神の啓示に関する教義憲章 7)。

さて、当然のことながら、教会の教導職(司教と司祭、あるいは牧師と呼ばれる人々)の主要な、そして第一の任務は、信者に使徒たちの証しである啓示の内容を説き聞かせることであり、信仰の目標が救済史の完成である神の国なのだということを教えることです。教会は古くからミサ典礼文や信仰宣言によって、あまりにも明確にこのことを表明して来たにもかかわらず、現代のキリスト教諸教会はそれとは全く違う方向に進んで来てしまいました。つまりそれはローマ・カトリック教会だけ、あるいはプロテスタントのある一部だけの問題ではなくて、近・現代という時代の流れであると言う方が当たっているように見えるのです。

「新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ。」(マコ 2:22) “これからの時代のキリスト教は、使徒たちの時代のキリスト教の継続ではなくて、新しいキリスト教に脱皮しなければならない”という声が、すでに進歩派と呼ばれる人々の間で圧倒的に大きくなり、事実そのような新しいタイプのキリスト教が第三世界を中心に急速に広がっています。日本のキリスト教会の実態も、もはやこの例外ではありません。

使徒たちの宣教によれば、イエス・キリストの受肉から再臨までの教会の時は、旧約聖書が語って来た救済史の継続であり、その完成の時であります。教会が自らを“聖なる、普遍的、使徒的、唯一の教会”と宣言して来たのは、歴史の教会の歩みがこのような救済史の一部であるという認識の表明でありました。

ですから、もし“新しいキリスト教”というものがこの救済史の連続性を断ち切ってそこから脱皮するのであれば、それは新しい別の宗教を始めることであって、いわば買収による経営者の交代、父・子・聖霊なる神が“知られざる神”(使 17:23)と入れ替わることなのです。そこではもはや聖書は正典ではなくて、ただの“有益な宗教文書の一つ”にしか過ぎません。

すでに半世紀以上前から、教会というものを“使徒や預言者という土台の上に、キリスト・イエスをかなめ石として”(エフェ 2:20) “造り上げてゆく”(エフェ 4:12)という使徒的発想が見失われて、それに代わって“教会という宗教団体を効率的に経営する”という考え方が圧倒的に強くなって来ていたのです。

—*—*—*—*—*—*—*—

私が今回の「聖書講義」を、敢えてそのような現実のただ中で書いているということに、もし注目してくださる信者(信徒にせよ教導職にせよ)がおられるなら……、それは主の恵みによることです。

「しかし、神は彼になんと告げているか。“わたしは、バアルにひざまずかなかった七千人を自分のために残しておいた”と告げておられます。同じように、現に今も、恵みによって選ばれた者が残っています。」(ロマ 11:4-5)<==(王上 19:1-18)

私のささやかな奉仕が、「主の羊たちが御言葉によって命を受けるため」(ヨハ 10:10)に用いられますように。